

「女人講の意味するもの～ムラの女性の役割～」

藤 由美

はじめに

船橋市や八千代市の旧村では、ムラ行事としての地域祭祀を支え、ムラ内の親睦をはかる様々な講中があり、ウブスナを祀る氏子中をはじめ、若者組（現代は祭礼の若衆や消防団）、出羽三山講、庚申講などが今でも続いています。また、女性の講では、「子安講」（まれに「十九夜講」の名称のままのところもあり）や「秩父講」が「女人講」として続いている地区もあり、『船橋市史』や『八千代市の歴史』の民俗編には、その講の様子が報告されています。

筆者も、講の集まりを拝見し、お年寄りに昔のことをお聞きする機会がありますが、それらの講、特に女人講の姿は、伝統を踏まえながらも時代に合わせて変遷しており、聞き取り調査でも、昭和初期以前のことは不明なことが多いのが現状です。

本来の「女人講の意味するもの」を探るには、近世文書があればよいのですが、それも乏しく、最も手近に参考になるのは、石造物に込められたメッセージです。

石造物を追いながら、江戸初期に遡って、女人講とムラの女性の役割を考えていきます。

(1) 現在の女人講の姿

1. 子安講の現状

①子安講とは＝子安講は安産・子育ての神である「子安様」を祀る若奥さんの講。

信仰的な集まりであるが、農繁期でもかならずお嫁さんを出席させることになっていて、昔からお嫁さんたちの息抜きの場であり、骨休めのレクリエーションでもあった。

八千代市下高野のように十九夜講の伝統を継ぐムラの子安講の場合は、「十九夜講」の名称のまま、毎月19日に開かれることが多いが、最近はその前後の週末に行われるようになり、場所も本来の当番宅からムラの集会所や寺院で行っている。戦後のベビーブーム期は、子供たちも多く、会場が母子であふれるほどであったという。

当番は朝、寺社境内の子安塔に香華を手向け、料理（最近はやすらぎのみ）を準備し、本尊の子安像の掛け軸を掛けて、灯明を供える。この灯明の燃えさしは、お産が軽く済むようと妊婦が持ち帰る。

毎月の儀礼は子安講の「ハナミ」（「ハツセ」）唄の唱和と直会であるが、新春の「子安びしゃ」では、当番の交代の儀礼をおこなう。

②近年取材した八千代市内の子安講

・高津新田の子安講（2002年）＝15日に集会所で行う。諏訪神社の元治2年（1864）造立の子安地藏と弘化5年（1848）の子安観音の2体の石仏「子安様」が本尊。

・高津の子安講（2005年）＝19日に高津山観音寺で行う。「水子地藏」（昭和59年建立）に参拝。料理のメインは鶏飯。33年に1回子安塔を建立、最近平成26年（2014）9月19日造立。

・麦丸の「子安びしゃ」（2016年）＝毎年3月17日に、東福院境内の「やすらぎの家」で行う。蓬菜や灯明、七つの具の入った神饌などの伝統をよく維持している。子安講の本尊は文化15年奉納の「子安大明神」の掛け軸。

③船橋市内の子安講（*1『船橋市史 民俗・文化財編』）

・海神一丁目（中組）＝シュウトメ世代の講、毎月17日に稲荷神社にあつまる。

・鈴身＝10年毎に子安塔のインダテを行う。蓮蔵院には元禄3年（1690）十九夜塔から21基の女人講の石塔が並ぶ。近年の平成3年の子安塔は庚申塔と同時。

・中野木＝二十～五十代。子連れで参加するので、「子供は子安講で育つ」といわれる。子ができると、正月か盆に「仲間入り」。4月13日には市川の根本寺に参詣。

・前貝塚＝毎月8日、おばあさんたちが行伝寺（日蓮宗）でのおこもりして子安様を拝む。

2. 消えゆく子安講

・大和田新田では、昭和32年（1961）に子安講の記念碑を建てて解散し、メンバーの大方は秩父観音霊場巡拝の「秩父講」に移行。

・麦丸でも、十年位前までは毎月に行われていた子安講は省略されて、年1回の「子安びしゃ」のみとなった。

・本来は、子育て世代のヨメの講であるが、孫を持つシュウト世代が多い地区（海神・漁師町）もあり、生活や母子保健の改善で子安講の役割も減少しつつある昨今、続いてほしいという声もあるが、社会の少子化と講員の高齢化の波に抗するのは不可能に近い現状である。

3. 盛んになる秩父講

子育てが終わった同世代の女性たちは、連れだって秩父観音霊場巡礼の旅を行ってきた。

ムラの女人講は、**子安講⇒秩父講⇒念仏講**へと世代別に移行していく地域が多かったが、子安講は若い母親世代の減少により、また念仏講は超高齢化により、参加者は年々減って、風前の灯という地区が多い。

成田街道沿いの八千代市や佐倉市、四街道市域では、戦前から、子安講を卒業した女性たちによる秩父講が盛んで、参拝記念碑の造立が今なお続いている。

この記念碑は、男性たちの出羽三山参拝記念碑に形態的にも似ており、ムラ内では、**男性の「奥州参り」と女性たちの「秩父参り」が同等に扱われている**様子がわかる。

(2) 石造物で探る過去の女人講

1. 「女念仏講」から十九夜講へ

北総の江戸前期と中期の女人講の石造物の主流は、如意輪観音像を刻む「十九夜供養塔」であるが、つくば市北条新田の江戸初期の寛永十年（1633）の十九夜塔などでは「十九夜待」ではなく、「**十九夜念佛**」と刻んでいることから、十九夜塔は月に一回、**十九日という日（夜）を決めて念仏の集まりを行う「念仏供養」塔であったと推測される。**

また、江戸前期の女人講は、十九夜念仏に限らず、地藏菩薩などさまざまな主尊を拝み、十五夜など十九夜に限らない「**女（房衆）念仏講**」も主流であった。

万治元年（1658）の船橋市本町の**地藏像塔**は、「さんや村」の「**念仏講中間拾貳人同女人十六人**」が造立にかかわったこと、また寛文10年（1670）の八千代市米本の**地藏像塔**も「**女房衆念仏講同行二十三人**」の銘があり、安産子育ての地藏として伝えられてきた。

一方、旧小見川町南下宿善光寺には、万治3年（1660）の宝篋印塔と天和3年（1683）の笠塔婆には、「**日記念佛衆**」として百名以上の名が刻まれているが、**半数以上は女性の名前**である。

さらに「女念仏講」による造立では、船橋市不動院の元禄14年（1701）銘の六観音を六面に浮き彫りした**石幢**があり、「奉新造六観世音 **女念仏講**為二世安楽」と六観音の浮彫りの下には、「**獵師町横丁 不動院月栄代**」それ以下に、「妙真・妙案」など出家した尼と思われる法名が19名、「おふう・おい女・およし」などの女性の俗名20名が刻まれている。

また、旧小見川町小見川の正福寺の元禄3年（1690）六**地藏文字塔**には、「奉安置六地藏塔廟二世安楽所 堂前**女坊（房）衆**同道十三人」と13人の女性名があり、船橋市印内町一丁目の**木戸内地蔵堂**の貞享4年（1684）銘の通称「**成瀬地藏**」には、「**念仏講連衆**」として**女人名19名**が刻まれている。

江戸時代の初期、ムラには、**共同体の二世安楽を祈る念仏読誦の講**が盛んであり、**女人講はその中心**であったと思われる。

2. 十九夜塔の盛隆

茨城県側の利根川対岸では、万治元年（1658）如意輪観音像を線彫りした「**十九夜念仏**」塔が利根町徳満寺に造立された。

千葉県側でも万治4年（1661）銘の「（サ）奉寄進**十九夜待**」の銘文の下に**14人の女性名**が刻まれた**板碑型文字塔**が香取市長岡の観音堂に建立されるが、この塔は女人講であることが明記された千葉県で初めての十九夜塔である。

続く寛文年間には浮彫や丸彫、六臂や二臂の多くの如意輪観音像が十九夜塔として建てられていき、江戸前期から中期のころ、女人講の石塔として**如意輪観音像を刻む十九夜塔は、関東北東部を席卷**（*4）し、北総では、江戸前・中期（17～18世紀）で1500基、幕末までには二千基ものの十九夜塔が建立されていく。

十九夜塔建立主体の十九夜講では、「**十九夜念仏和讃**」を唱えた。これは、毎月十九日に集まって、十九夜念仏を唱えれば、血の池地獄に堕ちた女人を如意輪観音が救済してくださるという内容である。「**血の池地獄**」とは、「**血盆経**」という室町時代に中国から伝来した差別的な偽経に出てくる地獄のことで、月経とお産で流す血の穢れから女性が逃れられない恐ろしい死後の世界とされる。（*3）

当初の十九夜講は、ムラとイエの現世安楽、来世での先祖、特に女人救済を祈願する「十九夜念仏」の性格も強かったが、江戸後期には、安産子育ての現世利益を祈願する性格が強くなり、やがて「子安講」へと移行していった。

3. 子安講の石造物

安産・子育て・子授けを祈願する女性の子安講が建てる子安塔は、「**子安大明神**」銘の子安石祠と、主尊が乳幼児を抱く**像容を刻んだ子安像塔**に大別される。

千葉県内で最古の子安塔は、元禄 4 年（1691）の袖ヶ浦市百目木子安神社の「子安大明神」銘子安像塔である。（*4）

北総では、元禄 16 年（1703）の八千代市上高野子安神社の「子安大明神」銘の子安石祠が古く、船橋市でも子安石祠が子安像塔にやや先行して現れる。

後者の子安像塔は江戸中期後半から普及し始め、「子安大明神」銘のほか、「十九夜講」や「子安観音」銘が見られるようになる。船橋市での初出は米ヶ崎無量寺の、安永 8 年（1779）如意輪観音が子を抱く姿の子安像が浮き彫りされた「十九夜講」銘石塔である。

江戸後期には、さまざまな像容の子安像塔が建てられ、幕末から近代になると、十九夜塔に代って、印旛・東総地域の女人講石造物のほとんどを占めるようになるが、東葛地域では、市川以西の江戸川流域での子安塔建立はほとんど見られず、船橋市古作町熊野神社の明治 20 年（1887）光背型子安像塔が最西端である。

4. 江戸時代後半～近代、消えた石塔の女性個人名

江戸時代中期後葉からは、建立年と建立に関与した人名は、本体の右・左面に記され、台石に村名と「女人講中〇〇人」「同行〇〇人」などの銘が刻まれる。人名は、「世話人」二～三名が多く、「〇〇エ門」や「〇兵エ」などの家名（いえな）となり、女性の個人名列記はなくなる。十九夜講や子安講など女人講がムラの講として組織的に定着し、供養塔造立の費用や手間も、ムラ単位の事業として確立したからであろう。

後期も、女人講関連の石造物での女性個人の名前が記されないが、まれに、家名に「内」「母」「妻」を付して表記される事例が見受けられる。

文化 9 年（1812）の印西市押付水神社の普門品供養塔では、本体と台石に近隣の村を含む 117 人の人名中、24 人の女性が、「伊蔵妻」など「妻」銘や「庄右エ門母」など「母」銘が記されている。

八千代市萱田町の万延元年（1860）銘の女人講奉納の手洗石には、53 人の人名中 35 人の女性名があり、それは「青木市良左エ門妻・中臺武右エ門母」という固有名のない表記であった。

宗門人別帳でも、妻は「誰々女房」とだけ記して名前が省略されている例も多く、女性は結婚すると、夫の付属物として領主から把握され、固有名詞は無視された時代であったと推測されるが、同時にイエ制度が確立していった時代ともいえる。

(3) 江戸前期のムラの女性たち

1. 男女が対等であった石塔建立

ムラの講による石塔造立が行われるのは、ムラの生活が安定した江戸前期の万治のころ（1658～）からであるが、そのころから中期前葉の元文のころ（1740）までの石塔には、結衆した多くのムラ人の名前が列記されていて、念仏講や女人講関連の石造物では、「おとら・おくら」などの女性名列記も多い。

また、男・女別の講が同年同日にペアで石塔を建てることもこの時期の特徴である。

八千代市吉橋の尾崎では、寛文 8 年（1668）十月十日、台座に「なつ・まつ」など 16 人の女性名のみ連記した日記念仏塔を建立しているが、この同年同日には、男性名 18 人列記の勢至菩薩像を刻んだ二十三夜塔も建立されている。

元禄 5 年（1692）、同じく吉橋の寺台でも、男性は二十三夜塔、「おとら・おたけ」などの 30 人の女性には聖観音像の日記念仏塔を造立している。男・女それぞれ別の講を構成しつつも、信心業の証しとして造塔の事業を同時に営んでいることは、当時のムラ内の女性の地位を表しているといえよう。

また、八千代市萱田では、寛文 9 年（1669）の「二十三夜講」と「日記念佛」の趣旨の銘を、三層塔の塔身に面を替えて刻み、それぞれ男女別に名前を記している。その「おつる・おこう」など 24 人の女性名列記の前には「一結施主 女中衆」とあり、女人講の成立がうかがわれる。

このように、一つの石塔の別面に、男女別に名前を列記する例は、同市萱田の延宝元年（1673）の庚申塔でも見られ、この笠付角柱型塔の右面に「およし・おきく」など女性 33 人、左面には男性 15 人、正面に僧など 3 人の名が刻まれている。萱田では、いずれも男・女それぞれの講が共同して、これらの供養塔を建立したのであろう。（*5）

2. 平等に供養された女性のお墓

八千代市麦丸には、江戸時代を通じて営まれ、墓地整理などの改変を受けていないマイリ墓がまだ残っており、2016 年に八千代市郷土歴史研究会の有志と、麦丸のセイマイマエ墓地の墓塔全数の年銘、戒名の位号、形態、像容にわたって調査を行った。その塔数は 173 基、被供養者の人数は総計 200 名で、年銘による時代区分と位号、それによる男性・女性・児童の別について分析を行った。

その結果、麦丸での墓塔の造立は、寛文・延宝期から造立が盛んになり、1700 年代（元禄 13 年～宝永～正徳～享保 5 年）が最も多く、1760 年～1780 年代（宝暦 10 年～明和～安永～天明～寛政）に数に陰り

が見え始める。1800年代（文化・文政）に回復するように見えるが、そのころは童子・童女という子供の位号が増えて、その分さらに大人の信士・信女銘の墓塔数は減っていくことになる。

江戸後期に童子・童女の位号が増えるのは、幼少時の死亡が増えたわけではなく、人口停滞期で少子化が進み、それだけ子供が大切にされ、子供の死を悼んで手厚く供養するようになったからであろう。

また大人の位号は、ほとんどが信士・信女で幕末までかわらず、近現代に多く見られる居士や大姉はない。例外的に2例ほど院号がつく信女の墓塔があるが、それ以外にムラの人々の間の階層化は見られず、極めて平等である。

また信士や禅定門の男性位号より、**信女・禅定尼の女性位号**がやや多く、男女間の差がないのはもちろん、**如意輪観音像塔の多さや院号がつくなど、女性に対する供養のほう**が丁寧であった。（*5）

(4) ムラの女性たちの役割とは

1. 女人講は「女人成仏」への切ない祈りか？

伝えられた「十九夜念仏和讃」からは、不浄ゆえにおとされる「血の池地獄」から逃れ、「女人成仏」を求める女性たちの悲痛な祈りが伝わってくる。お産での死亡者はさらに救われ難く、「流れ勧請」のような呪術的な民俗行事も戦前まで行われていたという。

また山岳密教系の霊場の多くは修行を妨げるとして「女人禁制」であり、女性は「罪深き五障三従のあさましき身」（「蓮如上人御文」）と仏教的にも蔑視され、さらに封建制度の中で大家父長制下では家内奴隷のように扱われ、「女大学」などのように儒教的な支配下にあったといわれてきた。

しかし、江戸前期の石造物から見ると、ムラの中での**女性たちは一定の役割を持って共同体の一員として活躍**し、男女の差もなく遇されていた。農村・漁村・町場の庶民層の女性たちは、男性に劣らずよく働き、その主婦権は、一部上層の家の婦人とは比べようもなく強固であった（*2）という。

中世仏教的な念仏講の中でも、女性たちは主体的であり、ムラ社会の中で女人講の結束は一目置かれ、ムラの大事業であった石塔建立では対等の地位が与えられていた。

文化文政期ごろからは、「女人成仏」のドグマのから解放を求めるように、神道系の祭祀であった子安神信仰を取り入れて「子安講」へと脱皮していく。産み盛りのヨメは、イエと地域から子を産み育てることを期待され、さらに、子育てを終わると「卒業記念旅行」として、秩父巡拝の旅を共にし、さらに結束を深めていった。

お施餓鬼で絵解きされる地獄絵や「十九夜念仏和讃」の世界を、いったいムラの女性たちはどのように見ていたのであろうか。

2. ムラ儀礼の一翼を担った女人講

江戸前期の念仏講では、ムラの女性たちが石塔建立などの一翼を担っていたことがわかるが、現在に伝わるさまざまなムラの祭礼行事でも、**女性たちの役割があった**。

田植えに際しては若い女性たちが「早乙女」として出仕し、各イエの祝い事では子安講の女性たちが「ハナミ」を歌いにいき、「テントウネンブツ」やトムライ、追善行事では念仏講の女性たちが念仏を唱えにいくなどの役割を、つい最近まで果たしていた。

女性たちは、イエ制度の確立によってイエに付くものとなったが、それ以前、ムラ共同体において、その祭祀を司る重要な役割があったと思われる。古代の伝統をひく有力氏族の神社では、「斎女（いつきめ）」が神に奉仕していたほか、沖縄諸島では「ノロ」や「根神」と呼ばれる神女たちが祭祀を司っていた。女性の持つ霊力が、ムラ共同体を守っていると信じられてきたのであろう。

17世紀半ば、近世の村が成立して、ムラ共同での石塔造立が可能になったころ、女人講の供養塔も遅れることなく建立されていることは、女性の集団での力がムラ内で評価されていたからに相違ない。

「女性は原始太陽であった」（平塚雷鳥）名残りを、江戸期のムラ社会に見出すのは難しいように思っていたが、女人講の姿を石造物の調査から探ることで、ムラの安泰を祈ってきた女性たちの役割を多少でもつかめたのではないかと感じられてきた次第である。

参考資料：

*1 船橋市市史編さん委員会 2001『船橋市史 民俗・文化財編』船橋市

*2 西海賢二 2012『江戸の女人講と福祉活動』臨川書店

*3 榎本正三 1992『女人哀歎—利根川べりの女人信仰』斎書房

*4 石田年子 2015「下総地方の十九夜塔」『日本の石仏』153号 日本石仏協会

*5 蕨由美 2010～2012「北総の子安像塔の系譜＝江戸時代中期におけるその出現と成立について」他『房総の石仏』第20～22号 房総石造文化財研究会

*6 蕨由美 2002～2017『史談八千代』27～41号 八千代市郷土歴史研究会